

## 現代史と歩んできた英徳紅茶

須賀 努Ⅱ文・写真



## 民国時代より生産を開始

広東省広州と言え、清朝の時代、一時対外貿易を独占するなど、貿易の一大拠点というイメージが強く、多くの茶葉がここから海外へ輸出され、中国茶の名声を高めた場所。だが広東省は茶葉貿易だけでなく、実は茶産地としても知られている。広州から150キロほど離れた英徳の紅茶は、欧州にもその名を知られた銘茶であり、しかもその発展は現代中国史とつながっており、実に興味深い。

英徳紅茶の歴史を見ると、民国時代に既に小葉種を使い、紅茶が作られていたが、本格的には1950年代に英徳農場が作られ、雲南から大葉種が、そして福建から水仙という品種が導入され、茶園が作られていく。59年の茶葉試験場（現茶葉研究所）設立、そして60年には紅茶輸出が始められ、外貨獲得の重要物資となっていく。広東省がここに茶葉研究所を設け、そして現在もそのまま置かれていることからこの地の重要性は十分に伝わってくる。

派閥争で右派と目された幹部が下放され、農業に従事したとの話があった。ちょうど紅茶作りが盛んになりかけた時期であり、貴重な労働力になったのだろうか。現在は広州市内から高速道路が通っており、わずか2時間程度で行ける場所ながら、山に囲まれた谷間の土地は、相当辺りな場所だったに違いない。往時は茶葉をトラクターに載せて広州まで1日かけて運んだとの話も聞いた。

また69年ころには文化大革命で下放された知識青年たちがここで茶作りをしていた、いわゆる知青茶廠だったという。前述の紅旗茶廠の名称が紅旗に改名されたのもこのころであり、何となくこの工場には文革のにおいが残っていると、古びた製茶機械を眺めながら、天井に響くような声で当時働いていた古老は語る。

さらには英徳紅茶の香りを楽しんでいると、目の前に「英徳華僑茶場」という文字のフラッグが見えた。これは79年の中越戦争でベトナム在住華僑が大量に帰国を余儀なくされたが、その一部はこの茶廠にやって来て、受け入れられた歴史があることを示していた。時期はちょうど改革開放初期、ベトナム帰りの労働者が茶作りで活躍したであろう情景が目につく。そういえば、この付近の建物、あのハノイなどでよく見られる独特のクリーム色がよく使われており、あれと思ったが、そのような理由だったのだろう。英徳の紅茶には新中国のさまざまな歴史が詰まっていた。

## 宇宙帰りの種子が成長中

一方で新しい英徳を見ることができた。神舟



紅旗茶廠の高い天井



積慶里紅茶谷で英紅を味わう

11号が英紅9号の種子も載せて宇宙に旅立ったのは今年のこと。持ち帰られた種子のうち、4つが発芽し、育っているという。普通の葉と比べて、丸い形になっていたのはやはり宇宙の影響だろうか。この茶葉で作られた新・英紅9号の紅茶をぜひ飲んでみたいと思ったが、その日は来るのだろうか。

また積慶里紅茶谷という、郊外の風光明媚な茶園にも案内された。大自然の中にきれいに茶樹が植えられている。小雨が降っていたが、その光景の中で極上の紅茶を入れてみると、かえって優美に見える。近くに温泉などリゾート施設もあるようで、広東省という立地を考えれば、これから人気の観光地になっていく可能性もある。



須賀 努（すが・つとむ）  
茶旅人、1961年東京生まれ。上海語学留学、北京、香港、台北で合計17年滞在。「茶旅」でアジア各地の茶畑、茶荘などを訪ね歩く。